

本人も困惑している「プーチンの負け戦」——主導権はウクライナ側へ

Putin's Botched War

2022年8月30日（火）16時13分

ウィリアム・アーキン（元米陸軍情報分析官）



Sputnik Photo Agency-REUTERS

＜「有能な最高司令官」と肥大したエゴで独り善がりの作戦を強行し、ロシア軍は誤算を重ねる一方、「量より質」のウクライナ軍は自信を深めつつある。勝負は「来年」の春か＞

まさか、まさかの展開である。2月24日の開戦から半年が過ぎたというのに、まだウクライナ戦争は続いている。侵攻を決断したロシア大統領ウラジーミル・プーチン自身を含め、ほとんど誰も予想できなかった事態だ。

しかしウクライナは大国ロシアの軍勢を相手に、なんとか持ちこたえている。西側からはそこそこの武器供与がある程度で、各国政治家の口先支援はあっても援軍は来ていないのに、だ。

広告



祖国の存亡が懸かっているから、ウクライナ兵の士気は高い。対するロシア兵にはまともな現地指揮官がいないし、支給される武器は劣悪で、補給も当てにならない。

そもそも最高司令官のプーチンが兵士たちの足を引っ張っている。プーチンは情勢を読み誤り、ウクライナ政府を転覆できると信じて侵攻を命じた。その後は東部ドンバス地方の制圧に目標を変えたが、うまくいかずに兵力を消耗させるばかりだ。

しかも制服組トップの将官たちの意見を聞かず、気に入らなければクビを切っている。戦場で死んだ将官も10人以上だ。残る将官はプーチンの怒りを買うまいと、（米情報当局の推測によると）不都合な情報を隠している。

プーチンはロシア国民とも戦っている。自由を奪い、ロシア軍の損失についての実情を明かさない。戦死者の遺体や傷病兵を人目につかないよう夜間に移送させ、親族への通知も遅らせている。

アメリカの軍部や情報機関の高官たちは本誌に、この戦争は想定外のことだらけだと語った。しかし最も重要なのは、プーチンが自分の部下をまったく信用していない点だという。

匿名を条件に取材に応じた情報機関の高官に言わせれば、プーチンは「独裁者の常として、自分が誰よりも、軍隊よりも、どんな専門家よりも賢いと信じている」。

勝利確実との思い込み

プーチンが軍隊にいたのは1975年のほんの数カ月だけで、ソ連軍の砲兵隊に所属していた。その後はずっとKGB（国家保安委員会）にいた。そしてロシア政府を率いてきた過去22年間で3つの国内戦とシリアでの作戦を指揮した。

それで自分は有能な最高司令官だと思い込み、ついでにロシアの軍隊は絶対に負けないと信じるようになった。そんな肥大したエゴの持ち主のいかげんな判断で、この戦争の行方は決まる。前線の兵士は使い捨てだ。

次のページ [ウクライナの防衛力を過小評価](#)

[1](#)[2](#)[3](#)[4](#)[5](#)[6](#)[7](#)[▶ 次のページ](#)

本人も困惑している「プーチンの負け戦」——主導権はウクライナ側へ

Putin's Botched War

2022年8月30日（火） 16時13分

ウィリアム・アーキン（元米陸軍情報分析官）

これは今や米軍と情報機関全ての見解が一致しているところだが、プーチンはロシアの軍隊がウクライナの民衆に「解放軍」として歓迎されるものと確信していた。

彼はかねてからロシアとウクライナの両国は歴史、文化、宗教、そして言語さえも共有する一つの国であると説いていた。だから8年前にクリミア半島とドンバス地方の一部を強奪すると、次なる作戦の計画を練った。そして、この8年でウクライナは一段と弱体化したと信じた。

広告



なにしろ今のウクライナの指導者（つまり大統領のウォロディミル・ゼレンスキー）はコメディアン出身で、勝利体験としてはダンスの腕前を競うリアリティー番組で優勝したことくらい。そんな男を失脚させ、ウクライナ全土を掌握するのは簡単だと、プーチンは判断した。

だからこそ、まずは数万のロシア兵を同盟国ベラルーシに送り、北からウクライナの首都キーウ（キエフ）に攻め入ることにした。

数的優位は明らかだから、最短72時間で首都を攻略できるとプーチンは踏んだ。ある意味、西側諸国もそういう判断を助長した。西側はロシアの戦争能力を過大評価する一方、ウクライナの防衛力を過小評価していた。

結果はどうだったか。首都へは迫れず、プーチンの戦争計画の大前提が崩れた。地上部隊は迅速に動けない。戦車や装甲車は道路で立ち往生し、物資等の補給は途絶えた。送り込んだ特殊部隊や空挺部隊は待ち伏せされた。ウクライナの防空システムを無力化するミサイル攻撃も失敗した。

柔軟性を欠くロシア

米CIA長官ウィリアム・バーンズは7月に、短期決戦での勝利を逃したのは「プーチンにとって戦略的な失敗」だったと指摘している。

戦いが長引いたことで、ウクライナ側は西側からの武器供与を待つことができた。同国のオレクシー・レズニコフ国防相は言った。「こちらの資源は限られているから、ロシアのような戦い方はできない」

違う戦い方ができるのは、高機動ロケット砲システムHIMARS（ハイマース）など、精密攻撃のできる兵器が届いたからだ。おかげでドニプロ（ドニエプル）川に架かる橋や後方のロシア軍陣地も攻撃できる。

それでもなおロシア側の戦術は変わらない。プーチンの固い縛りがあるからだ。

次のページ 異論を唱える者を遠ざけている

前のページ ◀

1

2

3

4

5

6

7

▶ 次のページ

本人も困惑している「プーチンの負け戦」——主導権はウクライナ側へ

Putin's Botched War

2022年8月30日（火） 16時13分

ウィリアム・アーキン（元米陸軍情報分析官）

複数の米情報筋によれば、プーチンは将軍たちに激怒している。

だが最大の失態はプーチン自身が4方面作戦——北は首都キーウ、東はウクライナ第2の都市ハリキウ（ハリコフ）、南東はドンバス地方、南西は港湾都市オデーサ（オデッサ）——に固執した点にある。

広告



短期決戦を前提に戦線を拡大したプーチンには長期戦に備える戦略がなく、代替策もなかった。

今のロシア軍はミサイルの在庫が手薄で、発射数を増やすことはできない。ウクライナ領内へロシアの爆撃機を飛ばすのも難しい。ウクライナの防空システムがしっかり機能しているからだ。

ロシア地上軍は戦力の3分の1以上を失い、攻勢に出る余力はない。ロシアとて無限の戦争能力を持っているわけではない。それでもプーチンは軍隊を前へ、前へと動かす。これは敗北への道だ。

ウクライナ側の損失も大きいが、今やロシア軍の7倍の兵力を動員できる。ウクライナの兵力は、報道されているよりもずっと多い。しかも新規の志願者が殺到している。

欧米にはまだ約20年前のイラク戦争時代の戦争観が残っていて、ウクライナ側の優位性を見落としがちだが、今の戦争は量より質の勝負。数字は当てにならず、ものをいうのは最新兵器の威力だ。

軍隊はたくさんの武器、たくさんの爆弾を欲しがらるものだが、少数でも精度の高い兵器を用いて標的を正確に攻撃できれば、より大きな戦果を得られる。この点でウクライナはロシアの上を行く。

「西側の、そしてウクライナの決意を砕けると考えたプーチンは間違っていた」とCIAのバーンズは言う。そして計算違いに気付いたプーチンは「目的を縮小した」とみている。もはやウクライナ全土の支配はもちろん、ドンバス以遠の領土を奪うつもりもないという見立てだ。

開戦からわずか3週間で、プーチンは首都キーウ制圧を断念した。そして現場の指揮官を次々と解任し、入れ替えた。複数の米政府筋によれば、プーチンは情報機関のトップや国防相とも争い、異論を唱える者を遠ざけている。

そして現場の指揮官をさらに混乱させた。南部戦線の拡大にこだわり、ウクライナの黒海沿岸部の制圧を命じたことで、軍隊はドンバス地方の占領地確保という本来の任務に集中できなくなった。

これでプーチンと制服組の溝が広がったと、英軍情報部のジム・ホッケンハル中將は8月初めに指摘している。

[次のページ プーチンの口出しが大損失をもたらす](#)

[前のページ](#) ◀ 1 2 **3** 4 5 6 7 ▶ [次のページ](#)

本人も困惑している「プーチンの負け戦」——主導権はウクライナ側へ

Putin's Botched War

2022年8月30日（火） 16時13分

ウィリアム・アーキン（元米陸軍情報分析官）

禁じ手を使って兵士集め

米軍の情報部高官も、「プーチンの政治的な口出しが大損失をもたらしている」と本誌に語った。

「プーチンは革新を口にしながら、意思決定の中央集権化を進めている。権限を分散させ、開放的にし、現場のイニシアチブとリスクを引き受けなければ、硬直した戦略に逆戻りだ。結果、ロシア軍は今も火力と長射程の大砲、MRL（多連装ロケット砲）とミサイルによる攻撃に依存している」

広告



こうしてロシア軍は、じわじわと前進しつつも甚大な損失を出している。ウクライナ軍の背後を攻めるチャンスなど、ありはしない。

プーチンの欠点や失敗も大きかったが、この戦争はロシア軍の情けない状態を容赦なくさらけ出している。

このところロシア軍の新しい「ハイブリッド戦争」については多くのことが語られてきた。それは数的優位と特殊部隊やサイバー攻撃を組み合わせたものとされるが、ウクライナではどれも大きな効果をもたらしていない。

一方、戦車、歩兵、砲兵といった伝統的な軍隊は、組織の問題で弱体化した。蔓延する汚職、古風で有害ないじめの横行、戦う兵士の体力や精神状態を無視した冷酷な動員計画が現場の兵士に疲労と恐怖、士気の低下、反抗的な空気を生み出している。

情報筋によれば、戦場から逃げ出す兵士や戦闘を拒否する兵士の数は異常なほど増えている。一方で死傷したロシア兵は既に8万人に上る。

ロシア国防省は、軍隊に入れそうな人間を探し出しては強引に引き入れ、ボーナスや上乗せ手当を支給しているが、それでも兵員の供給が追い付かない状態だ。

ロシアの傭兵、とりわけ正規軍を補うという名目で編成された悪名高いワグナー・グループについては多くの批判があるが、この戦争の遂行には彼らの存在が不可欠だ。

次のページ **ロシア軍の情けない状態**

前のページ ◀

1

2

3

4

5

6

7

▶ 次のページ

本人も困惑している「プーチンの負け戦」——主導権はウクライナ側へ

Putin's Botched War

2022年8月30日（火） 16時13分

ウィリアム・アーキン（元米陸軍情報分析官）

ロシア政府が傭兵に頼るのは、正規兵には法律で決められた各種の規則や権利、給与水準があり、手続きも面倒だからだ。代わりにチェチェン人などの「ボランティア」で構成する部隊も動員している。

プーチンはまた、かつてのソ連時代にあったような青年運動を全国的に展開している。米情報筋によれば、この運動は国際メディアと西洋文化のロシアへの浸透に対抗すると同時に、社会全体の軍国化と、軍隊への支持を生み出すのが目的だという。

ウクライナに関する「フェイクニュース」を宣伝しているという口実で、既に既存メディアとインターネット上の言論の自由は剥奪されている。一般市民が戦争の犠牲者に対して示す同情も、社会における「弱すぎる姿勢」として非難の対象になる。

この戦争が始まって以来、何千人もの反戦デモ参加者が逮捕された。プーチンの弾圧がロシア社会に及ぼす影響は計り知れない。CIAの観測では、余裕のあるロシア人は既に国外へ逃れている。国外にいて、戻る気のない人も増えていて、この半年で200万人に迫るといふ。

新たな戦略の用意がなく、攻勢を強めようにも兵力と装備が足りなくなれば、さすがのプーチンも停戦交渉に入るか、偽りの勝利宣言をするしかあるまい。あるいは、核兵器の使用をちらつかせることが勝利（あるいは延命）への最善の道と考えるか。

米政府は当初から核兵器使用のリスクを考慮し、ウクライナ政府に対してはロシア領内の標的を攻撃しないよう、固くクギを刺してきた。結果、ロシアはある意味で戦術的な優位に立てた。

そうでなければウクライナ国境からわずか数キロのベラルーシ領やロシア領に陣を構え、出撃することなど不可能だった。その点で、核兵器の存在が抑止力になったのは確かだ。

だが、プーチンが核兵器を実際に使用するとは考えにくい。核兵器で攻撃するほどの軍事的標的がないからだ。

次のページ 士気は依然として高いウクライナ軍

前のページ ◀

1

2

3

4

5

6

7

▶ 次のページ

本人も困惑している「プーチンの負け戦」——主導権はウクライナ側へ

Putin's Botched War

2022年8月30日（火） 16時13分

ウィリアム・アーキン（元米陸軍情報分析官）

ウクライナ北東部ハルキウ近郊で砲撃するウクライナ兵（7月28日） VYACHESLAV
MADIYEVSKYY-UKRINFORM-FUTURE PUBLISHING/GETTY IMAGES

ウクライナ兵100万のうち、4分の3に当たる75万人は2400キロ以上に及ぶ前線と後方地域、国内各地の基地に分散している。

一方、第2次大戦ではナチス・ドイツとソ連・欧州連合軍が前線に1500万の兵力を集結させていた。「戦術」核兵器という概念が生まれたのは、これほどの兵士が戦場に集まっていた時代だ。

核兵器を擁護する人々の考えが間違っているのは、昔の戦場の状況を現代に当てはめている点にある。

ロシア軍がウクライナに送り込んだのはせいぜい11万人。ウクライナ侵攻を「戦後最大の戦争」などと不吉な言葉で表現するから、それなら核兵器を使う意味もあるという誤解が生じる。もちろん、プーチンがそんな妄想を抱いている可能性は否定できないが。

ロシア軍撤退の可能性はどうか。旧ソ連は1989年に、約10年に及ぶアフガニスタン戦争から撤退している。その前例に倣うことは可能だ。

今回の戦争では、ロシア軍は一貫して前進を続けているとされ、ウクライナは辛うじて持ちこたえているだけとみられてきた。

しかし、こうした見方はウクライナ側にとってプラスに働いた。手遅れになる前に武器と支援を送ってほしいという西側諸国への訴えに、切実さが増したからだ。

ロシア軍がキーウ周辺から撤退し、ドンバス地方での攻撃を再開して4カ月近くになるが、ウクライナに対して決定的な打撃を与えられずにいる。

セベロドネツクとリシチャンスクを占領したが、多大な人的犠牲を払った。ルハンスク（ルガンスク）州の大部分を掌握したが、その後は再び膠着状態に陥っている。地上部隊は徐々に前進しているが、ペースは遅く、戦死者があまりに多い。

次のページ 勝負は「来年」の春

前のページ ◀

1

2

3

4

5

6

7

▶ 次のページ

本人も困惑している「プーチンの負け戦」——主導権はウクライナ側へ

Putin's Botched War

2022年8月30日（火） 16時13分

ウィリアム・アーキン（元米陸軍情報分析官）

こうした状況に、ロシア軍の士気は確実に低下している。一方、米政府およびNATOの情報機関によれば、ウクライナ軍も同程度の死傷者が出ているものの、士気は依然として高い。新たな部隊を次々と投入し、兵士の命を守るための作戦も講じている。

ウクライナ軍は量より質

プーチンの号令の下、ドンバス地方の残り半分（ドネツク州）の戦線ではもっぱら砲撃戦が続いている。接近戦では士気の高いウクライナ軍に勝てないから、ロシア軍は伝統的な砲撃戦を重視し、ミサイルやロケット弾の雨を降らせている。

今まではウクライナ軍が劣勢だったが、西側からの追加軍事支援により、長射程で精度の高い武器を使えるようになってきた。

オデーサを含む南部戦線では様相が異なる。ロシア軍は立ち往生し、ドニプロ川の西側の占領地域で孤立している。ウクライナ軍が、川に架かる主要な道路や鉄道橋を破壊し、補給線を断つたためだ。

前線で持ちこたえるのをやめ、ロシアの前線部隊への補給を断ち、兵糧攻めにする。ウクライナがそういう戦略に転換したため、この戦いは長引いている。もはや最前線の戦闘員を殺し、戦車を破壊すれば済む話ではない。今のウクライナ軍は後方にあるロシア軍の基地や弾薬庫、物資や燃料も攻撃できる。

南部戦線の司令官ドミトロ・マルチェンコは通信社RBCウクライナの取材に「いずれヘルソンは完全に解放される」と語ったが、その時期についての明言は避けた。

「予測は好きじゃないが」と彼は言った。「こちらが必要とし、供与を約束された武器が全て手に入れば、来年の春には勝利を祝えると思う」

今年の春までに戦争は終わると、プーチンは読んでいた。その読みを見事に覆したウクライナの人たちは今、自信をもって先を見据える。そう、勝負は「来年」の春だ。

※画像をクリックするとアマゾンに飛びます

2022年9月6日号（8月30日発売）は「**世界に挑戦する**

日本人20」特集。YOSHIKI／米倉涼子／山下智久／
YUTA（NCT127）／Travis Japan（ジャニーズJr.）ほ
か エンタメ界のパイオニア20

前のページ ◀

1

2

3

4

5

6

7